論文の和文要旨	
論文の題目	**モンゴル語の方向性を持つ補助動詞について** **—内モンゴルの文語資料を中心に—**
氏名	斯欽格日楽 (スチンガルラ)

本論文では、内モンゴル文語資料のコーパスを用い、モンゴル語の方向性を持つ補助動詞の意味機能を分析し、その意味機能が実現する条件を明らかにした。データ分析は、筆者の内省によるものだが、内モンゴル中部方言においてアンケート調査を実施し、確認を取った。

本論文は、6 章からなっており、序章では、研究背景、研究目的、研究対象、研究方法及びモンゴル語表記、方言分布について述べた。

第 1 章では、まず、補助動詞の定義、補助動詞の分類、及び本研究で扱う補助動詞の位置づけを取り上げ、次に、補助動詞の意味の実現は、主動詞の性質 (限界性・瞬間性・意志性)、副動詞接尾辞の意味と深く関わっていると仮定し、動詞分類を行い、副動詞接尾辞の意味について言及した。

第 2 章では、補助動詞 ab- (もらう)、ög- (あげる、くれる)、ali- (もらう) の意味機能について述べ、これら補助動詞の意味が実現する条件を明らかにした。

1. 授受的意味を表す場合

- 補助動詞 ög-, ab- は、遠心的方向性、求心的方向性両方を表せるのに対し、補助動詞 ali- は、求心的方向性のみ表す。補助動詞 ög-, ab- は、「身内」、「ヨソモノ」などの人称制限がないが、補助動詞 ali- は、話し手、或いは話し手の「身内」にのみ使われ、かつ命令・希求形表現のみと共起する。
- 補助動詞 ög-, ab- は否定表現と共起することが可能であるが、補助動詞 ali は否定表現と共起することが不可能である。補助動詞 ab-, ali は、意志動詞とのみ共起するが、補助動詞 ög- は、意志動詞、無意志動詞どちらとも共起する。ただし、無意志動詞と共起する場合は、必ず否定表現と共起する。

2. アスペクト的意味を表す場合

- 補助動詞 ög-, ab- は、両方とも限界動詞に後続し「行為の完遂」の意味を表す。この場合は、補助動詞 ög- の主動詞の位置に、無意志動詞がくるのに対し、補助動詞 ab- の主動詞の位置に、意志動詞がきている。両方とも否定表現と共起しない。
- 補助動詞 ab- は、「行為の完遂」を表す他、「元の状態に戻る」という意味、「行為の開始」などのアスペクト的意味をも表す。

3. モダリティ的意味を表す場合

・ 授受的意味を表す場合の補助動詞 ög- は、日本語の「～てやる」のように「自棄自虐、強い意志」の意味を表す場合もあれば、「～てくれる」のように「不利益・迷惑」を表す場合もある。

・ 「行為の完遂」を表す補助動詞 ög-,ab-、「行為の開始」を表す補助動詞 ab- は、「マイナスの感情・評価的意味」を表す場合がある。

第 3 章では、補助動詞 oru-(入る)、γar-(出る) の意味機能について述べ、これら補助動詞の意味が実現する条件を明らかにした。

1. アスペクト的意味を表す場合

・ 補助動詞 oru- は、マイナスの意味を持つ言語活動動詞に付き、「行為の開始」を表し、nebtere-(貫く)、günǰegeyire-(深化する) という主体変化動詞に付き、「進行相」を表す。それに対し、補助動詞 γar- は、一時状態を表す主体動作動詞、内的情態動詞に付き、「元の状態に戻る」という意味を表し、edürǰin (一日中)、sönǰin (一晩中) 、keǰiyede (いつも) などの時間副詞と共起し、「行為の持続」を表す。また、動作動詞に付き、「行為の完遂」、変化動詞に付き、「変化の達成」を表す。

・ 補助動詞 γar- は、「行為の開始」を表す場合もあるが、その意味の実現は文脈に頼るものであると考えられる。

2. モダリティ的意味を表す場合

・ 補助動詞 oru- は、「条件可能」のみを表すのに対し、補助動詞 γar- は、「条件可能」、「能力可能」の両方を表す。

・ 補助動詞 oru- は、「中に入る」という方向性をイメージできる動詞に付くが、補助動詞 γar- は、「外に出す」という方向性をイメージできる動詞に付く。

・ 補助動詞 γar- は、「可能」の意味を表す他、弁別に関わる動詞に付き、「見分けが付く」という意味をも表す。

第 4 章では、補助動詞 ire-(くる)、yabu-(いく)、oči-(いく)、od-(いく) の意味機能について述べ、これら補助動詞の意味が実現する条件を明らかにした。

1. 「持続相」を表す場合

・ 「持続相」を表す補助動詞には、補助動詞 ire-, yabu- がある。

・ これら補助動詞は、主動詞の限界性・瞬間性により、「動作の持続」、「結果持続」、「反復」などを表す。

・ 補助動詞 ire- は、過去から現在までの持続を表すが、補助動詞 yabu- は、過去から現在までの持続を表す他、現在から未来への持続、過去のある時点からある時点までの持続をも表す。

2. 「進行相」を表す場合

・ 「進行相」を表す補助動詞には、補助動詞 ire-, yabu-, oči- がある。
・ 補助動詞 ire- は、出現動詞、進展的動詞、終了限界達成を含む動詞に付くのに対し、補助動詞 yabu- は、進展的動詞、消滅動詞などの終了限界達成を含む動詞に付く。一方、補助動詞 oči- は、瞬間性のない限界動詞に付く。
・ 補助動詞 ire- は、マイナスの意味を持つ言語活動動詞に付き、「行為の開始」と「進行相」を同時に表す場合もある。

3. 「変化の達成」を表す場合

・ 「変化の達成」を表す補助動詞には、補助動詞 oči-, od- がある。
・ 補助動詞 oči- は、消滅を表す瞬間性のある主体変化動詞と状態変化動詞に付くが、補助動詞 od- は、消滅を表す瞬間性のある主体変化動詞と経過動詞に付く。

4. 「行為の完遂」を表す場合

・ 「行為の完遂」を表す補助動詞には、補助動詞 ire- がある。
・ 意志的に行う終了限界達成を含む主体動作・客体変化動詞に付く。

5. 手段」と「状況」を表す場合

・ 「手段」と「状況」を表す補助動詞には、補助動詞 ire- がある。
・ 意志的に行う主体動作動詞に付く場合は、「手段」を表し、非意志的に行う主体動作動詞に付く場合は、「状況」を表す。

第 5 章では、アスペクト的意味観点、モダリティ的意味観点から、これら補助動詞の相違点をまとめた。

1. アスペクト的意味を表す場合

アスペクト的意味を表す補助動詞には、補助動詞 ög-, ab-, oru-, γar-, ire-, yabu-, oči-, od- がある。

A. 「行為の開始」を表す補助動詞には、補助動詞 ire-, ab-, oru-, γar- がある。補助動詞 γar- 以外は、マイナスの意味を持つ言語活動動詞と内的情態動詞につき、「行為の開始」を表すと同時に、マイナス感情・評価的意味を表す。

B. 「行為の完遂・変化の達成」を表す補助動詞には、補助動詞 γar-, ab-, ög-, od-, oči-, ire- がある。補助動詞 γar- 以外は限界動詞 (主体動作・客体変化動詞、主体変化動詞、内的情態動詞) に付く。

C. 「元の状態に戻る」という意味を表す補助動詞には、補助動詞 γar-, ab- がある。補助動詞 γar- は、非限界動詞 (主体動作動詞、内的情態動詞) に後続して使われるが、補助動詞 ab- は、非限界動詞、限界動詞のどちらにも後続して使われる。

D. 「持続相」を表す補助動詞には、補助動詞 yabu-, ire-, γar- がある。これら補助動詞は、意志動詞、無意志動詞、限界動詞、非限界動詞のどちらとも共起することができるが、主動詞の位置に主体動作・客体変化動詞がくる場合は、その動詞は客体の位置変化をひきおこす動詞、もしくは所有関係の変化をひきおこす動詞に限られ、主体変化動詞がくる場合は、位置変化動詞に限られる。

E. 「進行相」を表す補助動詞には、補助動詞 ire-, yabu-, oči- oru- がある。意志動詞、無意志動詞、限界動詞、非限界動詞どちらとも共起することができるが、補助動詞 yabu- 以外は瞬間性のない動詞に限る。非限界動詞に後続する場合は、主動詞の位置に、進展的過程を持たない動詞がきているが、限界動詞の場合は、補助動詞 yabu- を除き、主動詞の位置に、進展的過程を持つ動詞がきている。

2. モダリティ的意味を表す場合

A. アスペクト的意味、モダリティ的意味を同時に表す補助動詞には、ög-, ab-, oru-, γar-, ire- などがある。

- 補助動詞 ire-, ab-, oru- は、マイナスの意味を表す言語活動動詞に付き、「行為の開始」を表すと同時にマイナス感情・評価的意味も表す。
- 補助動詞 ab-,ög- は、マイナスの意味を持つ主体変化動詞に付き、「行為の完遂・変化の達成」を表すと同時に話者のマイナス感情・評価的意味を表す。
- 補助動詞 γar- は、時間的副詞と共起し、「行為の持続」を表すと同時に話者のマイナス感情・評価的意味を表す。

B. モダリティ的意味のみを表す補助動詞には、補助動詞 oru-, γar- がある。これについては、第 3 章で述べたため、ここでは割愛する。

第 6 章では、特に本論文が先行研究に対して新たな知見を加えた点について、補助動詞別に整理した上、今後の課題について述べた。以下、表 1 に、先行研究及び本論文の主張についてまとめておく。本論文が先行研究に対して新たな知見を加えた点について

は、二重線を引き、先行研究と似た意味を表すが、用語が違う場合点線を引く。

表 1: 方向性を持つ補助動詞の意味 (先行研究及び本論文の主張)

	先行研究	本論文の主張
補助動詞 ög-	授受的意味、行為の完遂	授受的意味、行為の完遂
補助動詞 ab-	自分の方へ向ける、自分のために行う、行為の完遂、瞬間的に行われる	授受的意味、自分のために行う、自分に任務を背負う、元の状態に戻る、行為の開始、行為の完遂
補助動詞 ali-	授受的意味	授受的意味
補助動詞 oru-	状態移行、行為の開始	行為の開始、進行相、可能
補助動詞 γar-	行為の開始、行為の完遂、可能	行為の開始、行為の完遂、行為の持続、元の状態に戻る、可能、見分けが付く
補助動詞 ire-	持続相、進行相、行為の完遂、その動作、状況に至ったこと	持続相、進行相、行為の開始、行為の完遂、手段、状況、
補助動詞 yabu-	持続相、空間移動	持続相、進行相
補助動詞 oči-	漸次的変化、行為の完遂	進行相、変化の達成
補助動詞 od-	離れるという意味、行為の完遂	変化の達成

本論文では、方向性を持つ補助動詞に関して、先行研究で既に指摘されている意味機能を確認すると同時に、先行研究で指摘されていない意味機能についても言及した。そして、主に主動詞の観点から、それら意味が実現する条件を明らかにした。副動詞接尾辞の観点からも以下のようなことが分かった。① -ǰu は、主動詞と補助動詞を結びつける場合に、もっとも一般的に使われる接尾辞である。② -γad は、主に、出現、消滅などの瞬間動詞あるいは終了限界達成を含む動詞に後続し、「元の状態に戻る」、「行為の完遂・変化の達成」、「持続相」、「進行相」を表す場合に使われる。「持続相」の場合は、主に反復を表す場合に使われている。③ -n は、-γad と同じく、出現、消滅などの瞬間動詞、あるいは終了限界達成を含む動詞に後続し、「行為の完遂・変化の達成」を表す場合に使われている。④ -γsaγar は、補助動詞 ire- とのみ共起し、「持続相」と「進行相」を表す場合に使われている。「進行相」を表す場合は、進展的過程動詞のみと共起する。

本論文では、主に、主動詞の性質 (意志性、限界性、瞬間性)、主動詞に後続する副動詞接尾辞、補助動詞に後続する肯定・否定表現に注目して研究を進めたが、今後、補助動詞に後続する接尾辞及び同一文中の副詞にも注目し、その関係を明らかにしたい。